

## 東大教授の恫喝——優生学史研究を始めたころ

今は、優生学史の研究をしても誰も怪しまない。ましてや、それを危険視することなど絶対はない。だが1970年代末は、事態はまったく違っていた。

数年前、ある大学の学位請求論文に、優生学史研究が提出され、審査員を依頼された。内容的にはじゅうぶんで何の問題もなかった。だが、この分野からしばらく遠ざかっていた私には、清々と優生学史が論じられ、議論が進んでいく雰囲気、違和感を隠せなかった。私がドイツ優生学史を始めた当時、このような研究はナチス復活につながる危険な兆候と糾弾され、それに必死に抵抗した。そのことが、鮮やかによみがえってきたのである。

### 優生学史を研究課題に

話は40年前にさかのぼる。

1976年に私は、三菱化成生命科学研究所・社会生命科学研究室に採用され、科学史の担当となった。いま振り返ると、このポストは、民間の研究所が後にも先にも一回だけ設けた生物学史研究の専任職であり、私は信じられないほどの幸運に恵まれたことになる。

社会生命科学研究室は、生命科学と社会との間に生じる問題を研究する組織として、この研究所を立ち上げた江上不二夫（1910～1982）初代所長が、当初からその必要性を考えていたものである。当時、この研究室は、アメリカの学界で大きな波紋を広げていた「遺伝子組み換え論争」を追いかけていた。

私は、この遺伝子組み換え論争のなかで言及され始めていた優生学の歴史を研究することにし、まったく手がつけられていなかったドイツ優生学の起源を調べることにした。そもそもそのような研究が国内にいたままでできるものか、不明であった。だが、大学図書館や国立公衆衛生院の図書館に優生学史の資料が保管されていることがわかり、民間の研究者であるため、さまざまな関係者の協力を得て、研究は少しずつ進んだ。

なかでも東大総合図書館は資料の宝庫であった。その理由は、1923年の関東大震災で東大図書館が全焼してしまい、国内外に向けて、東大に図書を寄付するよう呼びかけがされた。その結果、世界中から19世紀末から20世紀初頭にかけての出版物が大量に寄贈されたのだが、その中には、日本のアカデミズムがまったく関心を払っては来なかった分野の出版物もたくさん入っていた。優生学の成立は、この時期に重なっていたのである。

### ドイツ民族衛生学の始祖：A・プレッツ

ドイツ優生学の源流は、A・プレッツ（Alfred

Ploetz：1860～1940）が1895年に著した『民族衛生学の基本方針 Grundlinien einer Rassen-Hygiene

』であることがわかった。そしてこの本は、さまざまな意味で19世紀末という時代の精神を象徴するものであった。その副題は「第一部 わが民族の能力と弱者保護 民族衛生学試論および、ヒューマンな理想とくに社会主義との関係」というもので、プレッツの考えが濃縮されている。「第二部は秋にも出よう」という序文の言葉に反して出版されなかった。

## A・プレッツ『民族衛生学の基本方針』1895年

本の要旨はこうである。

文明が発達すればするほど弱者保護が浸透して、ダーウイン的淘汰が効きにくくなる。だからと言って社会的闘争を認めるのは非人間的であり、民族の転落を回避するためには、生殖質のレベルで操作すべきである、というのである。プレッツの論調は、副題で示されたように社会主義的色彩の強いものであった。

さらに優生学の成立は、生物学の上に社会を理解しようという、19世紀末に強くなった、社会を自然科学に還元して '因果論的' に説明しようとする態度の一つの形であった。事実、1910年の第1回ドイツ社会学会では、プレッツは「人種概念と社会概念、およびこれに付帯する問題」という演題で発表し、F・テンニース (Ferdinand Tönnies : 1855 ~ 1936) やM・ウェーバー (Max Weber : 1864 ~ 1920) と討議を交わしている。新興の優生学が、社会学の成立に関与したことは、1904年の第1回イギリス社会学会でもすでにあったことである。

優生学は、極右の学問ではなかったのである！

## 第1回ドイツ社会学会講演集 1911年

### 社会思想史学会における城塚教授の恫喝

こうして2年ほど資料を読んでいると、外に向かって発表したくなかった。ちょうどこの時、領域横断的な研究を標榜する社会思想史学会が発足した。そこで、他流試合に挑む覚悟で、79年秋に金沢大学で開かれた第3回社会思想学会に「ドイツ民族衛生学の成立」というタイトルで発表を申し込んだ。一般演題とは言え、発表40分、討論20分という本格的な研究発表の場であったが、私の申請は事前審査を通過した。この時の一般演題は2題であった。いま振り返ると、にわか仕立ての33歳の新参者であり、怖いもの知らずにも程がある、と思う。

「それでは……」と、司会の横山寧夫 (1920 ~ 2010) 慶応大学教授に促され、私は43分ほどの発

表をした。

広い会場の前の方に、ひとりの紳士が陣取っていた。その紳士が、私の発表が終わるや否や手をあげると……

「東京大学の城塚です。

**マックス・ウェーバ**

**ーが何を言ったか知らんが、こんな研究は危険だっ！**

」という大音声が会場にこだました。恫喝と言う以外、表現のしようのないものであった。

初めて見た、東京大学教養学部の城塚登（1927～2003）教授であった。ヘーゲル研究をはじめとする社会思想史の大家であり、むろんM・ウェーバーにも造詣の深い天下の東大教授が、「マックス・ウェーバーが何を言ったか知らんが」とは、たいへんな啖呵である。その大先生から、怒髪天を指す形相で怒鳴りつけられれば、縮みあがってしまうのが普通である。

しかし私は、ドイツ優生学史の資料を集める過程で、このような研究を企てること自体、最悪の歴史的事例であるナチス優生学にいくばくかの合理性を認めることになり危険ではないか、と訝しく思っていたから、このような事態も、少しは覚悟していた。

だが、いきなり大攻撃をくらった。この場でおし潰されれば研究者としての将来はない、こう直感した私は、考えつくあらん限りの正当化論をまくしたてた。自分でもわかっていたが、この時、かなり冷静であった。

一瞬、会場は水を打ったようになり、城塚教授は、目がテンになられたようだった。これまでこんな若造から、かくも猛烈な反攻を受けた経験はないのだろう。

これをとりなしたのは、水田洋・名古屋大学教授（1919～）であった。

「…だからですね、その善意がどうして悪に転化したかというところに、善意が具体化していく論理構造の問題があるんじゃないか、というのが今の話にからんでくるだろうと思うんです。非常におもしろいな。」

実は、『社会思想史研究 No.3』（1979年）の、私の発表と討議の部分（p.77～89）からは、城塚教授の恫喝の言葉は削除されており、水田教授の発言と前後が入れ替えられている。そのため全体としては、冷静なやり取りがあったようになっている。この報告を手にしたとき、あれ！とは思ったが、若かった私は、そういうものかと気にしなかった。今なら、抗議したはずである。

## 米本昌平「ドイツ民族衛生学の成立」（同上）

断っておくが、私は、決して城塚教授を非難しているのではない。戦後、長い間、ナチズムに連なるものすべては危険なものと全否定することが、知識人の使命だと信じられてきたのであり、城塚教授はまさにその価値観・信念体系を体現した戦後良心的知識人の、最後の世代の一人であった。

### 戦後精神の実証的批判

むしろ、私は望んで、戦後良心的知識人の価値規範と、これから必要と私が考える研究姿勢との違いを確かめに出かけたようなところがある。そして、予想外に深い本格的な議論となった。城塚教授が、前に塞がる大障壁としてたち現れてくれたからである。

それから10年後、私は『遺伝管理社会——ナチスと近未来』（弘文堂、1989年）をまとめたが、その序章で、戦後知識人の歴史感覚を念頭に、ナチス優生学という歴史上の超危険物を扱うための概念的な枠組みについて、慎重にかつ丁寧に論じたのである。幸いこの本は、第43回毎日出版文化賞を受賞することになった。

この本は、優秀な編集者である弘文堂の中村憲生氏がいなくては生まれなかった。その中村氏は、「米本さんの良いのは、戦後精神を実証的に批判するところ」と言っていた。

本人がうろたえるほど、私の心のありかを射貫いた言葉である。

『遺伝管理社会——ナチスと近未来』(弘文堂、1989年)